
釈迦金棺出現図

—所依たるテキストと制作背景—

京都国立博物館に所蔵される『釈迦金棺出現図』（以下、本図）は平安仏画の最高傑作の一つである。釈迦が涅槃に入ってまもなく、実母である摩耶夫人が悲嘆にくれていると、釈迦が棺から起き上がり説法するという劇的な母子の再会を描きだす。

本発表では、本図に金棺出現の場面とともに純陀の供養が描きこまれていることに着目する。本図に純陀の供養が描かれていることは先学によって指摘されているが、これまで本図の典拠とされてきた『摩訶摩耶経』や『仏母経』には純陀の供養に関する記述がなかった。しかし、会衆が様々な供物を差し出そうとする姿や、化仏が示現する様については所謂「大乘涅槃経」における純陀の供養の場面においても理解が可能である。加えて、本図の中央に描かれた立姿の菩薩についても、同じく純陀の供養に登場する文殊菩薩であることを確認し、純陀の供養が本図の主題の一つともなっていることを指摘する。

また、画面向かって左に純陀の供養、右に金棺出現と場面を描き分けようとする意識も見て取れ、純陀と摩耶夫人の間に描かれる文殊菩薩、阿難、須跋陀羅が「大乘涅槃経」の末尾に登場し、彼らが涅槃前に起こる純陀の供養、そして涅槃後に起こる金棺出現をつなぐ役割を果たす可能性を述べたい。さらには純陀の供養と金棺出現の場面をつなぐテキストについての考察を行い、具体的には敦煌周辺で発見されている『仏母経』、また元時代に成立した『勅修百丈清規』に両者をつなぐ痕跡が見られることを述べる。

ところで、本図の制作背景については、しばしば女性の影響が指摘されてきたが、本図の施主となった女性の姿および使用方法を考察するにあたり、大江朝綱（八八六—九五八）の「朱雀院四十九日御願文」「朱雀院周忌御願文」に着目する。これらは三十歳の若さで崩御した朱雀院（九二三—九五二）の追善のため、実母である藤原穩子（八八五—九五四）が執り行った追善供養で使用されたものである。追善の願文は死者の冥福を祈る忌日法要の際に、喪主の願意を述べた文章であり、特にこの二つの願文には『摩訶摩耶経』または『仏母経』の影響が見られ、釈迦を朱雀院に摩耶夫人を穩子に仮託するような表現が見られる。

本図とこのような追善供養は直接結びつくものではないが、故人の追善という場が本図の図様の形成や使用の場に示唆を与えるものである可能性を提起したい。